

令和 2 年 10 月 13 日現在

機関番号：32106

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01642

研究課題名(和文) 子どもの死の認識と自尊感情を育む教育プログラムの実践的研究

研究課題名(英文) Practical study of the educational programs about child's death images and self-esteem

研究代表者

近藤 卓 (KONDO, Taku)

日本ウェルネススポーツ大学・スポーツプロモーション学部・教授(移行)

研究者番号：60266450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：いじめの問題や、それに伴う自殺の問題は深刻な状況であり、その対応は教育現場における喫緊の課題である。その際、子どもと日常的に関わる教師が、正しい知識をもち適切な対応をすることが必要である。

そこで本研究では、これまでのいのちの教育と自尊感情に関する研究成果を踏まえて、現場の教員らと連携しながら中学生、高校生を対象に「いのちの授業」を行い分析、検討を行った。その結果、生徒らの自尊感情得点の上昇があり、一定の効果が見られた。今後は、これらの実践の結果から得られた知見をより一般化し、多くの学校で現場の教師が実践することを重ね、より有効な健康教育プログラムを作り上げていくことが望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どものいじめの問題や、それに伴う自殺の問題は深刻な状況である。その際、メディアを通じた著名人の言葉や書籍など、あるいは、SNSなどのパーソナルなメディアが、より影響力を持っているという指摘もある。それらに対して、日常的に一貫して関わる教師が、正しい知識をもち的確な意識と態度で接することで、より有効な自殺予防ができると考えるのが妥当であろう。

本研究においては、いのちの教育と自尊感情に関する教師の知識、意識、態度を高め、具体的な行動の取れる力を持つことを目指した、健康教育プログラムの基本的な枠組みが得られた。これによって、発展的かつ実用的なプログラムの開発の足がかりが得られた。

研究成果の概要(英文)： We have some very serious problems about bullies and suicides by children at the school in this country today. At this point the teachers need psychological knowledges and some management methods about the problems.

Present research performed the programs of the life and death education to children at the junior high schools and high schools. As some results, the self-esteem test's points increased after the programs than before. The programs of the life and death education may be useful for the school teachers in helping children in their schools. Finally, some limitations and challenges of the study were discussed. Longitudinal data at short and long intervals would be required to generalize findings.

研究分野：健康教育学、臨床心理学

キーワード：自尊感情 いのちの教育 子ども

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、子どもによる問題行動や殺傷事件は、低年齢化に加え、その悪質さが社会に大きな衝撃を与えており、深刻な問題となっている。それらの背景には、子どもたちのいのちに対する考え方の変容や自尊感情の低下が影響しているのではないかと考えられるようになり、自尊感情を育むための「いのちの教育」に関心が寄せられている。そこで本研究では、自尊感情を育む要因と考えられる共有体験に着目し、共有体験を導入した授業を実践し、効果測定を行うことで、自尊感情を育むための具体的方策を検討する。

先行研究の結果を概観すると、以下のような問題点が明らかになる。第一に、共有体験を取り入れた「いのちの授業」による効果を確実に有効なものとするためには、限定された対象のみならず、全国の小学生から高校生まで対象を拡大させ、更なるデータの蓄積と結果の追認が必要である。第二に、共有体験と自尊感情の因果を仮定し検討を行った結果、共有体験が自尊感情を育む過程を検証する必要がある。第三に、より効果的に基本的自尊感情を育むには、日本の子どもたちの発達における特徴を踏まえ、どのような時期にどのようなアプローチをすればよいか、子どもたちの発達に沿って、具体的な方法を検討する必要がある。よって、本研究では広く小・中・高校生を対象に「いのちの授業」を行い、その効果測定データを蓄積して、共有体験を取り入れたいのちの教育プログラム的一般化を目指す。加えて、本調査結果より、今後のいのちの教育の具体的方策を検討するものとする。

James(1890)以来、自尊感情は様々な研究者によって定義されているが、概念の曖昧さに加え、知見相互による矛盾が指摘されることも少なくなかった。本研究で用いた尺度(近藤、2010)は、基本的自尊感情(Basic Self Esteem; B, b)と社会的自尊感情(Social Self Esteem; S, s)という二つの自尊感情を区別して捉えた上で、それぞれを別々に評価する尺度であり、実践的検証を行う上でその方法は画期的なものである。

また、基本的自尊感情を育む要因として共有体験に着目したことは、近年、学校教育の大きな課題とされている「いのちの教育」の実践を検討する上で重要な視点となるものである。身近な他者との体験と感情の共有(共有体験)が、自己肯定や自己受容を促し、基本的自尊感情を育むという仮定のもと、子どもの発達段階に応じた「いのちの教育」の実践と効果測定は、今後のいのちの教育を確実に有意義なものとするための一助となるであろう。

2. 研究の目的

そこで本研究では、初等中等教育の場で教員が児童生徒に対して教育活動を行う具体的な方法と、その教育活動に対する評価方法を明確にプログラム化して示すことで、より実践的な教育プログラムの提示をすることを目的として行われた。

3. 研究の方法

中学校、高等学校生徒を対象として、教員らと連携しつつ研究者自身が生徒らと関わることで、介入研究を実施した。事前事後調査として、第1研究と第2研究では心理尺度 SOBA-SET(近藤、2010)による量的な評価を行なった。第3研究では、KJ法を用いた質的な評価を用いた。

4. 研究成果

第1研究 中学校におけるいのちの授業の実践的研究 - 基本的自尊感情の育成に着目した効果測定から -

調査協力校は中国地方の大学附属の A 中学校である。市内の中心部からやや離れた地域に位置し、大学のキャンパスと同敷地にあり、附属小学校に隣接している。研究活動においても、附属学校の特徴を活かしつつ、大学と共同しながら、積極的に取り組んでいる。調査対象は、当該

中学校 2 年生 4 クラス 157 名であった。

本研究においては、自尊感情を高める要因は何かという視点から、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもに焦点をあて、「共有体験」を取り入れた授業を実施し、授業前後の自尊感情を比較することで、「共有体験」は「基本的自尊感情を高める」ことを明らかにするという目的を設定した。

その結果、授業実施前後の得点比較において以下の 3 点が明らかになった。

1. 女子の介入群と対照群の対象間において、それぞれの全 3 回における基本的自尊感情得点の平均値に有意な差が認められた。($p < .05$)
2. 女子の介入群と対照群の全 3 回の基本的自尊感情得点の平均値において、各測定時期間に有意な差が認められる傾向にあった($p < .10$)

以上の結果から、「共有体験」を導入した本授業は本研究の焦点として定めた、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもの女子において、効果があったと結論づけることはできないが、介入群と対照群に客観的な得点差があることを考慮すると、本授業が何らかの影響を及ぼしたことを示唆していると考えられる。

第 2 研究 A 合唱団における自尊感情の変化について～中国地方の中高校生対象の音楽教育活動から

A 合唱団は、平成 28 年 10 月に結成された。「歌がたりない」という、ある女子中学生の言葉から生まれた、10 代の生徒たちが対象の合唱団で、13 歳から 18 歳の中学生、高校生が参加している。その数は総勢 80 名にのぼる。A 合唱団には、合唱経験がある生徒が多数みられる。一方、中には合唱経験が全くないという生徒や、不登校を経験した生徒、まわりの人とコミュニケーションをとることを苦手とする生徒もいる。そのため、指導者は小中高等学校の教員、教育センター職員、相談員などがおり、生徒たちが安心して参加できる環境づくりをしている。また、合唱経験者や上級生がリーダーとなり皆を指導し、まとめる役割を担っていた。A 合唱団では、指導者がただ単に教えるというのではなく、生徒達で知恵を出し合い、お互いの出来ないところを補い合ったり、分からないところを教え合ったりして、切磋琢磨している姿が多く見られた。

SB タイプ(基本的自尊感情; B または b、社会的自尊感情; S または s)の比率が、高まる結果となった。集団活動においては共有体験を通して、自らの役割に気づいたり、支持あるいは称賛されたりする中で、自己有用感や自己有能感あるいは自己効力感が育まれることが起こり得る。これらの感情が高まることで、間接的に社会的自尊感情を育むと考えられる。こうしたことから、sB タイプは減少傾向を示し、その分バランスのとれたタイプであり、より望ましいタイプとしての SB タイプの増加につながったのではないかと考えられる。

一方、sb タイプは 12.8%から 3.5%へと激減した。このことは、明らかに共有体験の効果と考えられ、合唱練習の過程でともに歌い笑い、さらには合宿練習で汗を流したり涙を流したりしたことが影響を与えたのであろう。

社会的自尊感情も基本的自尊感情も低い sb タイプは、日常の学校生活の中でまず最初に心配される子どもたちである。何事にも自信が持てず、引っ込み思案となりがちで、集団の中で目立たず陰に隠れたような、存在感の薄い存在である。そうした子どもの割合が、3 分の 1 に減少したということは、注目すべき効果であるといえよう。

第 3 研究 高等学校におけるいのちの教育の実践～大学生と大学教員による基本的自尊感情を育む授業

中国地方 A 高校生徒 117 名、授業時間 50 分、2015 年 12 月 3 日、授業時間 B 高校生徒 614 名を対象とし、いのちの授業を行った。各校の概要については以下の通りである。A 高校は中国地

方の中核都市の農村部に位置している。普通科の昼間定時制高校で、豊かな自然と歴史的文化に富んだ環境にある。3年間で卒業をするコースと4年間で卒業をするコースがあり、自分のペースに合わせた学習ができる学校である。B高校は中国地方の中核都市の中心部に位置しており、県内でも有数の進学校である。有名大学への進学率も高い。また、全国体育大会や、全国大会に出場し好成績を収めるなど、部活動にも力を注いでおり、文武両道を実践している学校と言える。

A高校では、作文から抽出した単語・短文に「これからの人生頑張っていきたい」「生きていければいいことも悪いこともあるけど、乗り越えていかないといけないと思った」というような、生きる力を感じるもの。「お母さんを大切にすることがない」「昔のことを振り返り、ひとりでのいじめを受け辛い思いをした」と自己開示をするもの。「自分は自分でいいんだ」「人と比べなくていいんだ」「命は大切だと思った」と自分の存在やいのちを見つめ直すものなど見られた。

KJ法による分析から、最終的に「私は一人じゃない」「自分の中の何かが変わった」「自分の世界を広げたい」という言葉が導き出され、教員や大学生らの話を級友と肩の触れ合う距離で聞くという共有体験を通し、自分自身の存在を見つめなおすきっかけとなり、その感情が級友らと共有され、自分が今ここにいること・生きていることを再確認できたのではないかとと言える。以上のことから、筆者はA高校では生徒の基本的自尊感情が育まれたのではないかと考えた。

B高校では、「生きているからこそ色々な壁にぶつかって悩んでしまうことがわかった」「辛いことがあってもそれを乗り越え努力している姿を見て私も希望を待たなければならないと思った」「講演してくれた先生のような大人になりたい」と生きる力を感じるものや、『おかえり』と聞こえることもかけがえのない大切なもの」「大学生の歌や話を聞いてどんなことがあっても誰かに愛されている。そして生きていると感じた」など、日々の幸せに気づくきっかけになったもの、「居場所がないと思っていたので生まれてきた時『Welcome』だったことを教えてもらえてよかった」「私は今、自分が大嫌いで自分に不満を抱いていた。でも話を聞き気持ちを変えることができた」と自己開示するものが見られた。

そして、B高校の特徴として、『生まれ続けてありがとう』といつか誰かに言える日がくるといいな』など他者へ影響を与えたいと未来への希望を見出すものが挙げられた。以上のことから、生きる力を感じる基本的自尊感情に加え、B高校の生徒では、社会的自尊感情の部分により育まれたのではないかとと言える。B高校の生徒は元々、基本的自尊感情基本的がしっかり根付いている生徒が多く、その育った基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が育まれたのではないかと考えられる。

以上の結果から、A高校、B高校共に、大学教員や大学生の話を級友と肩の触れ合う距離で聞くという共有体験をし、その体験が自分自身の存在を見つめなおすきっかけとなったと考えられる。その時の感情が級友や学校の教員らと共有され、自分が今ここにいること・生きていることを再確認できたのではないかとと言えるであろう。

いじめの問題や、それに伴う自殺の問題は深刻な状況であり、その対応は教育現場における最重要の喫緊の課題である。その際、子どもに直接働きかける、メディアを通じた著名人の言葉や書籍なども、一定の抑止効果があると考えられるが、限定的であり一過性の影響に終わる可能性がある。それよりも、子どもたちにとってはSNSなどのパーソナルなメディアが、より影響力を持っているという指摘もある。

それらに対して、日常的に一貫して関わる教師が、正しい知識をもち的確な意識と態度で接することで、より有効な自殺予防ができると考えるのが妥当であろう。そこで重要なことは、まさに教師の知識と意識と態度・行動であろう。

今後は、こうした教師の知識、意識そして態度を醸成し、具体的な行動の取れる十分な力を持

つことを目指した、健康教育プログラムの実践的研究を計画・実施していくつもりである。

子どもの意識を変え、態度の変容を期待するためには、当然ながら一定の期間が必要で、粘り強くその様子をつぶさに観察しながら、的確な関わりを続けることが必須である。

そこで、児童生徒と日常的に直接関わる教員が、正確な知識を持ち的確な意識、態度を持ち関わり続けることが必要となると考える。

<引用文献>

James,W. (1890).The Principlles of Psychology. Dover Publication,Inc

近藤卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学 金子書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 近藤卓	4. 巻 11
2. 論文標題 自尊感情を育む～乳幼児期の人の育ちと大人のかかわり	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ほいく心理	6. 最初と最後の頁 6-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤卓、山崎秀雄、田中佑果、音井美波	4. 巻 23
2. 論文標題 A合唱団における自尊感情の変化について～中国地方の中高中生対象の音楽教育活動から～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山陽論叢	6. 最初と最後の頁 121-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤卓	4. 巻 5
2. 論文標題 日本の文化に根ざした「私たちのPTG」～傷ついた器と金継ぎが示唆するもの～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 いのちの教育	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 5件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 近藤卓
2. 発表標題 自尊感情を高めるには～SOBA-SETを使って
3. 学会等名 日本学校教育相談学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 近藤卓
2. 発表標題 いのちの教育と自尊感情～心的外傷後成長(PTG)を支えるもの～
3. 学会等名 日本学校保健学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山田由美子、安井 仁、田中佑果、近藤卓
2. 発表標題 健康教育としてのいのちの授業～保健学習「ストレスの対処と心の健康～感情の共有と自尊感情～」
3. 学会等名 日本いのちの教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 近藤卓
2. 発表標題 自尊感情を育む
3. 学会等名 第21回日本いのちの教育学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 近藤卓
2. 発表標題 子どもの自尊感情をどう理解し育むか～私たちにできること～
3. 学会等名 第43回岩手県養護教諭研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 近藤卓	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 107
3. 書名 いじめからいのちを守る	

1. 著者名 近藤卓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 139
3. 書名 誰も気づかなかった子育て心理学～基本的自尊感情を育む～	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----